

2020 年度人文学部 FD 活動報告

(キリスト教学科、人類文化学科、心理人間学科、日本文化学科)

今年度は新型コロナウイルスの影響で、多くの授業がオンラインとなり、本学部でもその対応に追われることとなった。本学部でもサポートチームの教員が中心となり、全教員に zoom の使用法などが周知され、年度内の授業を大過なく終えることができた。その過程で zoom の効果的な機能や、オンライン授業における工夫などについての情報交換が、多くの教員間でなされた。

このほか、学部全体としては、カリキュラムに関する検討組織として学部内に常設された、各学科の時間割担当教員、学部教務委員、学部 FD 委員からなる人文学部カリキュラム委員会を計 8 回開催した。①卒業研究プロジェクト論文の成績認定についてのルーブリック化についての議論 ②学部 FD についての検討 などを行った。特に、卒業研究プロジェクト論文の成績認定についてのルーブリック化をめぐる議論の結果、4 学科共通の評価基準について一つ案を作ることができたのは大きな成果であったが、さらに、この議論を通じて、卒業論文の評価について多数の学部構成員が議論し、相互の考えを知り、自らの考えを深めることができたことは貴重な機会であり、副次的な成果であったと言えよう。

学部企画の FD 企画としては、学部主催の FD 講演会「ネット時代における大学授業での著作物の利用をめぐって」を、2021 年 2 月 19 日に実施した。当日は、当該の問題に詳しい、筑波大学図書館情報メディア系准教授村井麻衣子氏に講演を依頼し、その後活発な質疑応答が行われた。著作権についての基本的な事項を学んだ上で、大学教育に於ける著作権についての諸問題、特にネット環境下における問題について、参加者一同、知見と問題意識を深めることができた。51 名（うち人文学部教員 35 名）の参加があった。

次に、各学科においての主な取り組みを紹介する。

キリスト教学科は学科会議の場を中心に以下の活動を行なった。第一に、オンライン授業に関する大学の決定や学部の方針を定期的に確認し、各教員の授業運営に資する情報の共有につとめた。第二に、今年度から実施される卒業論文の電子提出に向けて、適切な論文指導のあり方について再検討しながら学生への周知文書を改良した。第三に、次年度の時間割編成の過程で、学科の理念、中長期的なカリキュラム維持、担当者の確保と調整、学生の履修状況について検討し、科目新設と科目名称変更の改正を行なった。これらに加えて、第 2 クォーター末に学科の FD 懇談会を企画して各教員のオンライン授業での実践例を共有し、学生へのケア、配布資料の工夫、有効な課題の出し方、技術上の問題点などについて議論し、各自の授業改善の取り組みをうながした。

人類文化学科では、文化人類学、考古学、哲学、言語学の 4 つのコースの各担当者間での現行カリキュラムの検討結果をふまえて、科目名称を一部改称するとともに、担当者の欠員が生じた一部の科目を廃止することで、現状にみあったカリキュラムに整備し直した。また、

前年度末に実施した卒業予定学科生による学科カリキュラムアンケートの結果を分析し、学科のカリキュラム・ポリシーとの整合性を検証した。学科の自己点検・評価報告書の内容を学科のFD委員会で検討し、とくに、カトリック系高等学校特別入試に関する学科としての今後の方針について議論を深めた。

心理人間学科は、①多様な機会をとらえて学生、授業の情報を共有すること、②公認心理師受験資格対応カリキュラムを計画通りに進めること、③新入生、卒業生、オープンキャンパス参加者を対象とした学科教育にかかる調査活動を行うことに加え、2019年度に策定した、学生の計画的な履修に対する学科の指針に沿った学生指導を行うことを定型化した活動計画としている。これらについてはできるかぎり実行したが、新型コロナウイルス感染症の影響、またそれに対する大学の対応の影響を受けて、予定通りに実施できなかったものもある。これらに加えて2020年度の活動として、公認心理師受験資格対応カリキュラムなど、近年新しく導入した仕組みの作用について検討することを計画したが、特殊な状況が1年を通して継続することとなったため関連する情報の収集を見送った。このように、計画したFD活動を十分に実施することはできなかったが、学科会議など多様な機会をとらえて学生や授業の情報を共有する活動は臨機応変なFD活動を促進したともいえるだろう。その結果、遠隔授業の方法について意見交換をする機会の設定や、学生と教員、学生同士がzoomを使って交流する機会の設定、遠隔での研究プロジェクト発表会の開催などを実施することができた。

日本文化学科では、まず、すべての学生が履修する基礎演習および演習の授業、さらに1年生登校日(2回)を通じて、学生・教員間の緊密なコミュニケーションを図った。特別な配慮や指導を要する学生に対しては、学科会議などを通じて教員全体で情報を共有するように努め、指導教員を中心に学科全体で指導することにより対応した。年度末(3月10日)には、「オンライン授業のメリットと課題：新型コロナウイルス流行下での取り組みを通じて」と題した企画を行い、福本拓准教授の報告のあと、学科教員全員で活発な討議を行った。特に、各種ツールの対面授業も含めた有効利用の可能性、録画機能の利便性、オンライン授業におけるグループワークの問題点等について情報交換、議論を行った。この企画は、オンライン授業について多角的に振り返り、その利点および今後の課題を明確にすることができ、大変有意義であった。

以上